

書評

田邊晃久 編

心臓突然死を予知するための
不整脈ノンインベシブ検査

日本医科大学名誉教授/四谷メディカルキューブ院長

早 川 弘 一

わが国において、心臓突然死のうちで不整脈によるものは年間約2万人の多数にのぼると推定されている。それゆえ、不整脈突然死の予知は極めて重要な課題である。予知する方法として従来から用いられてきたのは、心臓内にカテーテルを挿入して行われるインベシブな電気生理学的検査法であった。しかし、本法は経験を積んだ専門家のみしか施行できず、患者の負担も大であることが難点であった。

一方、ここ20数年来、ホルター心電図を含むノンインベシブな心電図記録法の工夫から、不整脈突然死につながるとある程度予知できる、あるいは逆に突然死は発生しないだろうという予測が可能になりつつある。しかし現在のところ、かかるノンインベシブな検査法を網羅したテキストは殆どなかった。ご本人自身もこの領域のバイオニアである本書の編

者の前東海大学教授の田邊晃久氏は、この種のテキストの必要性を以前より主張されていたが、今回やっとそれが実現したことになる。

不整脈突然死の原因としては冠動脈疾患、各種心筋症、心筋炎、重症心不全、高血圧性心疾患などあり、特異な不整脈発生病態として Torsades de pointes を含む QT 延長症候群、QT 短縮症候群、Brugada 症候群、特発性心室細動、洞不全症候群、高度房室ブロックなどが挙げられる。

これらの致死的不整脈の発生を概ね予知するノンインベシブな検査としては田邊氏によれば、現在のところ、12誘導心電図、運動負荷心電図、ホルター心電図(応用したものとして QT dynamics)、QT/RR 関係、加算平均心電図 (late potential)、T wave alternans、T wave variability、心拍変動解析、心拍 turbulence、

長期間使用可能な植込み型ホルター心電計などの多数の新しい方法が採用されつつある。

本書ではこれらの検査が、どの種類の不整脈突然死を予知できるかについて、あるいは予知できないかについて25人の研究者により詳細な記述が行われている。さらに、致死的不整脈を除外するための Baroreflex sensitivity、head-up tilt test なども取り上げられている。他方、187チャンネル加算心電図などの新しい研究も収められている。付録の小林義典氏による「心臓突然死予知および予防治療に関するガイドライン」は極めて有用である。巻末には上記検査のための最新の機器が紹介され、購入の際には大変役立つであろう。

これらの検査は今後ますます研究発展するであろうが、現時点における最新情報が本書に収められており、これらを応用することが不整脈突然死の予知、予防に役立つと確信できる。田邊教授の熱意に敬意を表するとともに、多くの医師、技師に精読を薦めたい。

[B5 頁 312 2010 年 定価
7,875 円(本体 7,500 円+税 5%)
医学書院刊]